

山形大学附属博物館報28

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2002 . 3

目 次

附属博物館の教育機能 博物館実習雑感	中 川 重 (1)
ウケクチウグイ顛末記	半 澤 直 人 (2)
資料紹介 石井柏亭「少女」	(4)
古文書あれこれ Information Desk	(5)
平成13年度事業報告	(6)

附属博物館の教育機能 博物館実習雑感

館長 中 川 重

本館が毎年実施している事業には、開かれた大学をめざした公開講座や特別展などのテーマを設定して開催する企画事業のほか、本学学生に対して「博物館法」による「学芸員」資格取得のために必要な「博物館実習」を実施している。この実習が開講されたのは、二昔以上も前の昭和55年度のことであった。当時の博物館運営委員会の一委員の発議が運営委員会で検討され、小白川キャンパスの人文・理学・教育各学部との合同協議の上、各学部に学芸員資格取得に必要なカリキュラムを整備した上で、博物館実習を当館が担当することになったのである。開講以来、昨年度までの受講生の総数は1,784名（人文学部 864名、理学部 550名、教育学部 370名）に達しており、ほぼ同数の学芸員資格取得者を養成してきた。

現在国立大学の中で、東京大学総合研究博物館など省令施設となった、いわゆるユニバーシティミュージアム8施設をはじめ、国立大学博物館等協議会に参加している大学を見渡しても、これだけ長年の実績を有しているところはほとんどないと思われる。博物館実習をいち早く博物館の教育機能として位置づけた当時の運営委員会等の先見性に敬意を表するとともに、今日まで実習そのものを担当してきた運営委員会委員や学芸研究員の先生方のご尽力・ご協力に深く感謝したい。

また、平成8年度からは、実習の一環として以

前から見学等で訪問している県立博物館に加えて県郷土館「文翔館」の見学も実施することになったが、実習生からは多様な施設・展示などが勉強できると大変好評である。ご協力いただいている両館には深く感謝申し上げたい。さらに、平成9年度からは、博物館法施行規則の一部改正にともない、博物館実習は事前・事後指導をふくめた3単位となり、より充実した実習内容となった。

しかし、全てが順調にしているわけではない。博物館実習は夏休み期間中に100名近い受講希望者を2～3回にわけて複数開講してきたが、平成11年度からの学年暦の変更にともない、各学部の集中講義や教育実習等との日程調整が窮屈となり、受講生のみならず授業担当の先生方にも無理をお願いすることになっている。また、1クラス40～50名では十分な実習効果が発揮できないことや、実習経費の捻出など検討しなければならない課題も多い。

さらに、博物館実習の開講にあたっては、小白川キャンパス以外の工学部・農学部・医学部の受講希望学生への対応も検討されたといわれるが、未だ実現していない。教養教育以外に全学レベルでのカリキュラム編成が存在しない現状では、各学部でのカリキュラム整備等を待つしかないが、今後の課題であることにはかわりはない。

附属博物館のもう一つの教育機能は、学部の授業で積極的に利用してもらうことである。教育学部では教育実習の一環として当館の見学を1年次の観察実習に組み入れるなど、徐々に授業での利用が定着してきているがまだまだ絶対数は少ない。

そのためにも、博物館の教育機能をより充実拡大していくことが、今後の重要な課題であることを忘れてはならないと思う。

以上、本館の重要な役割の一翼を担っている教育機能の一端を紹介したが、今後ユニバーシティ・ミュージアムの設置を目指すためには、博物館独自の研究機能の創出とともに、博物館実習はもとよりいろいろな教育機能の一層の充実に向けた自己評価・展望・計画策定等が必要であろう。附属博物館へのご理解とご支援ご協力、とくに具体的なご意見やご提案をお願いしたい。

(教育学部 教授)

ウケクチウグイ顛末記

半澤直人

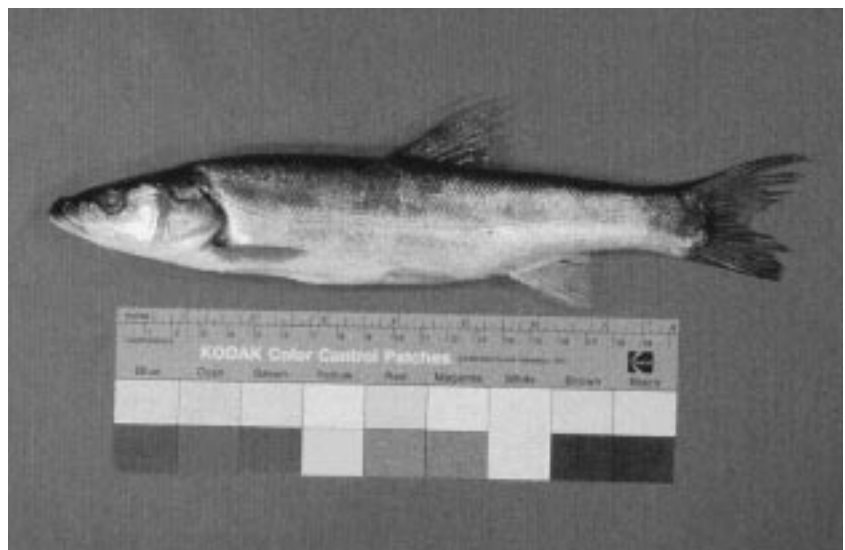
ウグイの仲間は、日本とその周辺地域の河川、湖沼から海までどこにでもいるありふれた魚であり、幼少の頃から雑魚すくいの獲物として慣れ親しんだ人も多いと思われる。また、釣り人や川漁師にとって、寒バヤ釣りや桜が咲く頃のアカハラ(産卵期で鮮やかな赤色に染まったウグイ)漁は季節の風物詩として、ごく身近なはずである。

このウグイの仲間は分類学上コイ科ウグイ属 *Tribolodon* に属し、昔から分類学者を散々苦しめてきた存在でもある。なぜなら、ウグイの仲間は日本周辺の北から南、河川から海まで広く様々な環境に生息し、地域ごとに少しずつ体の形が違っているものの全体的にはよく似ていて、一体何種に分けたらいいのか、常に学者によって意見が分かれてきたからである。このようなことから、かつてアメリカの高名な魚類学者 Hubbs 博士は「むずかしい分類の研究」の代名詞として“Ugui business”と呼んだという逸話が残っている。

1963年、中村守純博士はこのような分類がむずかしいウ

グイの仲間から、さらに奇妙な魚を発見し、新種としてウケクチウグイと名付けた。ウケクチウグイは、その名の通り下顎が上顎より前に突出して受け口になり、他のウグイの仲間とは大きく形が異なっている(写真)。しかし、分布が福島県、新潟県の阿賀野川水系と信濃川水系、山形県の最上川水系、および秋田県子吉川水系(酒井ら1991)に偏っていること、どこかの生息地でも個体数が極端に少なく、生態や行動もわからない幻の魚であることから、多くの学者は「単なる突然変異の奇形で、新種ではない。」と批判した。結局、それ以後正式な新種記載もされず、学名もないまま35年以上が過ぎることになる。

中村守純博士によるウケクチウグイの発見から約20年後、当時大学院生であった私はたまたま指導教官から「タンパクの遺伝的変異によるウグイ属の種分化の解析」を研究テーマとして与えられ、この厄介なウグイの仲間と取り組むことになった。元より福島県生れの私は、幻の魚ウケクチウグイには何となく親近感があり、また他のウグイの仲間も共に生息している阿賀野川水系は絶好のフィールドであることから、若さに任せて研究を始めた。福島県内の親類の家を起点として泊まり歩きながら、各地で漁師の協力を得て、阿賀野川水系に生息するウグイの仲間を多数集めた。そして、多くのタンパク質の遺伝的変異を検出して、ウグイ属の分化の解析をおこなった。その結果、体形が互いによく似て識別さえむずかしいウグイ属の中で、ウグイ、エゾウグイ、マルタ、ウケク



チウグイは別種と認めてよいほど高度に遺伝的分化を遂げていること、およびこれら4種は同じ阿賀野川水系に生息していても雑種を作っていないこと、すなわち互いに生殖的に隔離されていることが明らかになり、いくつかの論文で発表した(半澤・谷口 1982a,b, 半澤ら 1984, 半澤 1986)。また、ウケクチウグイが新種であることは疑う余地が無いので、当時の研究協力者の一人で大学院生として国立科学博物館で「ウグイ属の頭骨の比較解剖」を行っていた新沢裕行氏に、ウケクチウグイの新種記載を行うことを勧めた。しかし残念ながら、新種記載は行われぬまま新沢氏は大学院を修了して学校の先生になり、私も大学院を修了して魚類の研究から離れ、マウスの遺伝の研究に従事することになった。しかし、ウケクチウグイのことは頭の片隅から決して消えることはなかった。

それから15年近くが過ぎ、幸い私は山形大学で教鞭をとることになった。そして、始めて山形大学で指導した大学院生の一人に「DNA塩基配列によるウグイ属の分化の解析」を研究テーマとして与えた。その結果、直接遺伝子の塩基配列を調べると、さらにウグイ属4種の遺伝的分化が明確になり、また4種の間で雑種ができていないことも再確認し、国内外の学会で発表した(佐々木・半澤 1999, Hanzawa et al. 2000)。しかし、われわれの研究が進めば進むほど、学名が付いていないウケクチウグイのことが気にかかるばかりであった。そんな中、新沢氏のかつての師、国立科学博物館の上野輝弥博士から大変喜ばしい知らせが飛び込んできた。それは、ウケクチウグイの新種記載の論文が受理され、正式に学名が付いた(Doi and Shinzawa 2000)というものだった。その学名は、ウケクチウグイの発見者である中村守純博士に敬意を表して *Tribolodon nakamura* となった。その発見から37年目にして、ウケクチウグイは正式に新種と認められたのである。

しかし、ウケクチウグイには相変わらず疑問が多い。その一つは、「なぜ福島、新潟、山形、秋田の限られた水系からしか見つかっていないのか、また日本海の向こう側の大陸には分布していないのか。」ということである。最近われわれは、ロシア科学アカデミーとの共同研究によって、そ

の答えの一つについて発表した(Hanzawa et al. 2000, Kartavtsev et al. 2001, 2002)。すなわち、大陸側にはウケクチウグイを除く3種は分布しているがウケクチウグイは分布していないらしいこと、タンパクやDNA塩基配列の遺伝的変異による解析から、大陸の淡水域に生息する別属別種 *Pseudaspius leptcephalus* は進化的にウグイ属と同じ血筋のごく近縁な親類であり、将来これら2属を1属に再分類した方がよいらしいことなどを明らかにした。

最後に、ウケクチウグイの生態については依然として謎が多い。しかし、最近の河川や沿岸海域の環境悪化、ブラックバスなどを始めとする外来生物の混入や密放流は目に余るものがあり、魚などの小動物を餌としているウケクチウグイにとって影響がないはずがない。世界でも東北日本の日本海側の一部にしか分布していない珍魚、ウケクチウグイをシンボルとして、早急に水辺の環境保全と生物全体の保護対策を立てていかなければならない。

(理学部助教授
附属博物館学芸研究員)

資料紹介

石井柏亭「少女」

博物館所蔵の資料から、今回ご紹介するのは、一枚の水彩画である。「少女」と題するこの絵画は、明治末から大正、昭和30年代にかけて活躍した洋画家、石井柏亭の作品だ。昭和21年、来形していた柏亭が、図画の講習会のおりに制作したものだと言われている。モデルは、地元のある女性らしい。しかし確かな来歴はわかっていない。

作品をみてみよう。全体の色づかいは淡白で、迷いなくさっと描き上げたように感じられる。筆数は少ないが、けして足りないわけではない。丸みを帯びたあごの線から肩にかけてのふっくらとした量感の表現、おそらく東北の人間に違いない



昭和21(1946)年 縦34.5×横27(cm)

モデルの持つ個性、内面をうまく描き出している。モデルも素朴だが、描き方そのものにも力が入ったところがなく、軽快な印象を受ける。

実はこの作品、柏亭64歳の時の作である。もちろん、彼は既に画家としての円熟期を迎え、周囲からの十分な評価を得ていた。彼の画風は、その60年に及ぶ画家人生を通して、劇的に変化することはなかった。水彩画に関していえば、写実的で簡潔、そして淡白な作風は若い頃から変わっていない。しかしその一方で、彼は近代日本洋画史において、まさしく揺籃の時代を生きていたのであり、彼自身がその中心的存在であったとも言えるのだ。

石井柏亭という人物は、当時の美術界において、とても独特な関わり方をしている。彼は、画家である他にいろんな顔を持っていた。

画家(水彩、油彩、版画)

詩人、歌人

教育者(幼稚園園長、大学講師、文化学院美術部長)

編集者(「方寸」、「中央美術」)

批評家

以上の仕事の他にも、いくつかの美術団体の創立にたずさわ(二科会、一水会など)、40冊に

のぼる著作を残してもいる。その間に、国内外を旅して写生をし、各地で個展を開いている。

このように精力的に仕事をこなす柏亭は、画家仲間や、評論家たちの話題にのぼる事も多かった。日本画家の結城素明は、「技術、文筆、事務の才」の「三拍子揃った人」として、美術界において大変貴重な存在だと述べている。評論家の荒木季夫は、彼の当時の活躍ぶりを、「社交家」で「常識家」で「実際家」である故のものだとしている。このように、柏亭が万能な天才のように語られる一方で、彼については違った評価もあった。作家の宇野浩二は、柏亭を「非凡な凡人、凡庸な非凡人」と表現した。また、有島生馬は、「欠点のないところが柏亭の欠点」であると述べている。画家である上に文筆でも才能を発揮し、また社交家でもあり、そんな彼の器用さが、周りの人間には時として理解し難くもあり、味気ない人物、芸術家らしくない芸術家にみえたこともあったようだ。

そんな周りの評価は自然と彼の耳にも入って来たに違いない。彼が渡欧作品の展覧会を開いたときのこと、西川一草亭と正宗得三郎は、「堅実で洗練されている」と、作品をほめる一方で、「規模が小さく狭量で窮屈な事、やけなずば抜けた点のない事、有頂天になったといふ様なものがない事」などを気に入らぬ点としてあげている。そしてこの評に対して、柏亭は次のように反論した。

「天は小生に常識の分量を多分に与へてくれた。小生には性質上実際やけな処もなく有頂天になるといふやうな熱もないのである。常識あるものは美術家たるを得ずといふやうな掟でもあるなら、小生は美術家といふ肩書を剥がれてもよろしい。」

と、真っ向から対決姿勢を取っている。彼は自分の才能を発揮して、画作と詩作、評論、教育を同時にこなしていることに、自信を持っていたし、そんな自分が必要とされていることも知っていた。

また、それらの仕事は柏亭のなかで別々に分かれているものではなく、互いに結びついているものだった。事実、彼の著書に「よい画にはいつも詩がある」という言葉がある。風景をみて歌を詠むように、柏亭にとって絵を描く事とは、風景の中に、詩のようなもの=情緒を表現することだったのだ。

最後になるが、柏亭は多忙な中、山形を数回訪れている。昭和11年、山形新聞主催の第2回山形県総合美術展覧会に、洋画部門の審査員として呼ばれ、参加している。(やがてこの展覧会を契機に山形県美術家協会が結成されることとなる。) また、翌年には、文化学院で指導した^{ましもけいじ}真下慶治や近岡善次郎に案内され、肘折温泉を訪れている。柏亭が当時の県画壇に与えた影響を考えると、もう少しこの画家を身近に感じて貰えるのではないだろうか。(附属博物館 庄司 高子)

古文書あれこれ Information Desk

前号の館報で、本館の古文書史料目録(1号~23号)の紹介をしました。今回は古文書の利用等について、裏話しを含めた館の実情をお話したいと思います。

本館所蔵の古文書は、整理・分類・目録化されているものだけで3万点近くになり、県内の近世農村地方文書が中心です。近年、少数ではありますが、上杉氏の上級家臣であった安田家の武家文書や、山形の城下町商人として出発し、江戸後期から近・現代まで山形商業界で活躍している小嶋家の商人文書等が加わり、県内の古文書館としての役割も果たしてきました。

山形県史をはじめとする県内の各市町村史の多くが、本館所蔵の古文書を閲覧し引用していることから、その充実ぶりがうかがえます。

古文書の整理は、歴代の職員によって綿々かつ細々と行われてきました。昭和20年代につくられた手書き目録の旧字体の文字を目にするにつけ、整理に要した長い月日を思わずにはいられません。

ここ7・8年は、地域史・古文書の読解に精通された方から、短い期間ではあるものの、「資料整理」としてお手伝いをいただいているので、職員が古文書整理に奮闘する時間はだいぶ減ってきました。

しかし、通常業務の中で古文書に関わる仕事は決して少なくありません。閲覧希望者の方から古文書の内容や読みについての質問を受け、そのたびに四苦八苦というのが現状です。たった一字が読めないため、一行の意味がわからず、件名が採れないということもあり、「後世の人のことも考えて書いてくれないと……」というような愚痴と弱音を吐きながらの作業となってしまいます。

もちろん質問を受けるだけではなく、その逆もまた多いのです。読めなかった字を教えていただき、地域のいろいろな情報をお聞きし、「見せてもらう」「お見せする」という関係を越え、共に学んでいくことを実感するひとときです。

最近では、日本海酒田沖の孤島 飛島村(現酒田市飛島)文書の例があります。この文書は本館の初代館長でもあった長井政太郎氏収集の県内各地の文書の中に含まれていたもので、日本海海運の中、船の寄港地として重要な役割を担ってきた飛島の船宿に残る「客船帳」(宿帳)が主な内容です。実は県外からの利用者の半分程がこの文書を目的に来館されています。富山県公文書館、富山県日本海文化研究所、糸魚川市文化財保護審議会、氷見市史編さん室、そして、香川県大内町史編纂委員会等、たくさんの機関から閲覧に訪れ、続々と市史・町史・報告書等が刊行されました。西回り航路といわれる日本海海運の船は、北陸や京阪神のみならず、日本海側の東北から遠く四国まで往来し、日本海を媒体としてつながっていたのです。日頃、手にして目にしている馴染みの古文書でありながら、その重要性や役割を他県の方々から教えていただく結果となりました。

利用者の方々から、「おかげさまで」「ここに来て疑問が解決した」「項目ごとに分類されているので検索が容易だった」などと声をかけていただくたび、担当としてはありがたいかぎりです。コツコツと研究を重ね、時間を見つけては通ってくださる地域史研究家の方々のためにも、「開かれた大学」の博物館であるべく努力を続けていかなければなりません。

しかし、今後「貴重文書」の公開を考えていく上で、どうしても避けられない課題が残されています。それは、博物館が所蔵する資料(古文書を含む)は、「公開し利用の便をはかり、地域文化

の向上に寄与する」という目的はもちろんのこと、「いい状態で管理・保存していく」という使命も同時に与えられていることです。ほとんどの利用者が古文書を慈しんで大切に扱ってくださるのですが、ごく一部には、指定された場所での閲覧、コピーの禁止等の利用条件を守っていただけない方もおられます。地域の歴史を語る貴重な古文書を後世まで伝えゆくためにも、利用者の方々のエチケット再考をお願いしたいと思います。

(附属博物館 高橋加津美)

平成13年度事業報告

平成13年度に本館で実施した博物館実習の単位習得者数は次のとおりです。

(単位：人)

区分	1回目 8.7～10	2回目 9.18～21	合計
人文学部	9	16	25
教育学部	8	10	18
理学部	9	6	15
合計	26	32	58

公開講座は、「20世紀をふり返る 科学と芸術の100年」をテーマに開講されました。講師・演題は下記のとおりです。

第1回 10月6日(土)

・機械・ハリボテ・スクリーン

迷走する20世紀建築

山形大学助教授 阿部成樹

・20世紀の音

明海大学助教授 山本陽史

第2回 10月13日(土)

・ピカソなんて・・・ 20世紀美術考

山形大学教授 元木幸一

・年輪で探る古代の宇宙線

山形大学教授 櫻井敬久

第3回 10月20日(土)

・20世紀の生物学

山形大学助教授 小田隆治

・映画の20世紀

山形大学教授 阿部宏慈

特別展は、平成13年11月5日から16日までの10日間、「キャンパスのなかのキャンパス」と題し開催。小白川キャンパスのなかの事務室や会議室に掛けられている各部局所蔵の絵画、本館で各部局に貸出中の絵画、展示室に展示中の絵画等、学内の絵画を一同に集め公開しました。新聞等で報道されたこともあり、例年になく学外の市民の方々の見学が多く、好評をいただきました。

平成12年度見学者総数

一般成人	個人	337人
	団体	70
大学生	個人	1,652
	団体	253
児童・生徒	個人	4
	団体	113
合計	個人	1,993
	団体	436
	総数	2,429

山形大学附属博物館報 28 2002.3発行

編集兼発行人 山形大学附属博物館

〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12

(TEL) 023(628)4930(直通)

(FAX) 023(628)4909

<http://klibs3.kj.yamagata-u.ac.jp/museum/>